

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2026年9月18日

虫の音いろいろ

九月に入り、秋の気配が感じられるようになりました。昨年、一昨年の九月は最高気温が 30 度超えがあたりまえでしたが、今年はせいぜい 25 度前後の日が多く、数年ぶりに秋らしい秋を実感できるかもしれないなあ、などと期待している今日この頃です。

秋を感じさせるものの一つに虫の音があります。美しく、はかなげな虫の音は、日本では昔から秋の風物詩として親しまれてきました。おもしろいことに、虫の音に風情や趣を感じるのは日本人やポリネシア人など特定の民族に限られており、欧米の人たちにとってはただの雑音にしか聞こえないという話があります。外国人であっても、日本語を母語として育った人は、虫の音に対して日本人と同じ感性を持つのだそうです。

色々調べてみたところ、これには音を処理する脳のメカニズムが関係している、という説を見つけました。母音(あいうえお)を中心とした言語である日本語やポリネシア語を母語として育った人は、虫の鳴き声が母音の周波数とよく似ているため、虫の音を右脳(音楽脳)ではなく左脳(言語脳)で処理をしている。そのため、虫の音を単なる雑音ではなく、「声」「意味を持った音」として無意識のうちに受け止めているのだ、というのです。ほんまかいな？

どんな理由があるにせよ、日本人が虫の音と親和性の高い感性を持ち合わせている、という点については疑う余地はなさそうです。虫の声を聞いて感動できるのが日本人固有の性質だとしたら、日本人に生まれてきてよかったなあ、としみじみ感じます。というわけで、今回の校長室だよりでは、秋の虫、虫の音にテーマを絞って、俳句や短歌などを紹介してみたいと思います。

○露しげき 葎の宿にいにしへの秋にかはらぬ虫の声かな 『源氏物語 横笛』

虫の声は、聞く場所や時間、また聞く人の心境によって、華やかにも寂しげにも、さまざまに聞こえるものです。「かつては華やかな生活が営まれた邸が、今は見る影もなくさびれ、庭を覆う雑草は深く露を置いて秋の寂しさを感じずにはいられない。しかし涼やかな虫の声だけは、昔と変わらず今も美しく響いていることだ」というのがこの歌の解釈です。

この歌は、平安時代に紫式部によって書かれた日本を代表する古典作品、源氏物語の横笛の巻に登場します。光源氏の息子、夕霧は、亡くなった親友、柏木の妻の落ち葉の宮に恋心をいだき、ある秋の夕暮れ、落ち葉の宮とその母である一条の御息所の邸を見舞います。そこで、一条の御息所から柏木の愛用した横笛を贈られた夕霧が、これを試みに吹き鳴らしたところ、一条の御息所が詠んだのが「露しげき…」の歌です。物語にしたがってこの歌を解釈するなら、「露(=涙)が深く降りたこの荒れ果てた邸で、亡き柏木が生きていた昔の秋と少しも変わらない素晴らしい虫の声(=横笛の音色)を聞くことよ」とでもなるでしょうか。

無常の世にあって、人の命や営みはいつか失われていく、しかし自然の営みはいつの世も変わることなく繰り返されるのだ、というテーマは、多くの古典作品に見られ、古くから広く日本人に共通するメンタリティーであったことがわかります。

○くさひばり色なくなりし空に鳴く にしがき おさむ
西垣 脩

くさひばりは草雲雀とも表記する体長7～10ミリほどのコオロギの仲間の小さな虫です。秋の草地などで、「フィリリリ…」と小さな鈴を振るような澄んだ音色で鳴きます。

「色なくなりし空」は、うすずみいろ薄墨色に暮れなずんだ空のイメージでしょうか。ついさっきまで鮮やかな夕焼けに彩られていた空が、日が沈み、静かな夜の色をまとっている、とも解釈できますね。そんな寂しい空の下、クサヒバリが鳴いている。その美しくもの寂しい響きに耳を傾けながら、作者の胸にはどのような思いが去来しているのでしょうか。

秋の夕暮れ、わけもなく心細い感情にとらわれることがあります。いつか自分にもこんな経験があったかもしれない、こんな場面を目にしたかもしれないと不確かな記憶を呼び覚ますす何かが、この句にはあります。

参考までに、クサヒバリの鳴き声はこちら。https://www.youtube.com/shorts/J9wMKGqyc_g

○濃密な闇夜に足を組みかえて聞き入る虫の さむらいこと ば たかやなぎ ふき こ
侍 言葉 高 柳 路子

「濃密な闇夜に足を組みかえて」いる所作からは、ただリラックスしているのではないある種の緊張感、あるいはちょっとなまめかしい大人の世界の感じもしますね。何よりもおもしろいのが、鳴き交わす虫の音が侍言葉に聞こえてくるという表現。虫の音が「拙者せつしやコオロギと申す者そうろうに候。いざ今宵はともに歌わん」「拙者はスズムシ、助太刀いただき感謝の言葉もござらぬ」とか聞こえるということでしょうか？いやいや、どう聞いても侍言葉には聞こえないでしょ、と思う反面、じっと耳をすましていたら、もしかしたら侍言葉に聞こえるのかもしれないなあ、と期待する気持ちもじわじわ湧いてきます。

ユーモラスで、鮮明で、独特の世界観を持った一首です。

○背後には鬼もあるべし虫の闇 もりおか せいさく
森岡 正作

夕方時々、千波湖の周りをジョギングしています。この季節、走っているとあちこちの闇の中から今を盛りと鳴く虫の音が聞こえてきます。

暗い闇の中から虫の音だけが聞こえてくることを「虫の闇」といいます。闇の中から湧き出てくるような虫の音。その虫の音に包まれながら、じっと耳を澄ましていると、周囲のすべてがかき消され、まるで自分と虫の音しか存在していないような、混沌とした不思議な感覚を覚えます。古語の「ゆゆし」には「美しい」と「不吉だ」の二とおりの意味があります。古来日本では、美しすぎる美は時に魔を呼ぶと考えられてきました。

虫の音に酔いしれながら、作者はふと自分の背後に何者かの気配を感じます。それは例えるなら、鬼のような非日常の存在。真っ暗な闇の中で作者は、ひやりと冷たい恐怖とともに、その何者かも、またこの美しい虫の音に魅せられているに違いないという確信を覚えるのでした。

そんなふうに、自分はこの俳句を理解しました。

○「あら！鈴虫だわ。バッタじゃなくってよ。」と、女の子は褐色の小さな虫を見て眼を輝かせた。
川端 康成 『バッタと鈴虫』より

川端康成に『バッタと鈴虫』という短編小説があります。「私」はある夜、美しい五色の提灯をかざして、子供たちが草むらで虫とりをしている場面に通ります。すると一人の男の子が「誰かバッタ欲しいものはいないか？バッタ！」と仲間に呼びかけます。「おくれ、おくれ」と数人の子どもが駆け寄りますが、男の子はその手を払いのけてしまいます。再び男の子は「バッタ欲しいものはいないか」と呼びかけますが、やはり近寄ってきた子供たちには渡しません。

「ちょうだいな。ちょうだい」一人の女の子がやってきます。男の子は「バッタだよ」と断って虫を女の子に渡します。すると女の子は親指と人差し指でつまんだ虫を見て「あら！鈴虫だわ。バッタじゃなくってよ」と驚きの声をあげるのです。

もちろん男の子は最初から、好きな女の子に鈴虫をあげる計画でいました。しかし、初めから鈴虫とは言わず、価値の低いバッタだといって貴重な鈴虫を渡すサプライズで、女の子の喜びを倍増させたのです。この様子を見ていた「私」は、男の子の早熟な策略に驚くとともに、美しい提灯の光の中で描かれる幼い恋のゆくえに思いを馳せるのでした。

まるで幻燈のような情景の中で演じられる淡い恋と、それを少しシニカルな思いで見つめる「私」。読後に不思議な余韻を感じさせる作品です。

鈴虫の鳴き声はこちら。 <https://www.youtube.com/watch?v=YDEQHJ-U1m0>

○子と我と「り」の字に眠る秋の夜のりりりりりりあれは蟋蟀 俵 万智

お父さんとお母さんと子どもと一緒に寝ることを「川の字になる」と言います。三人が縦に並んで寝ている様子を上から見れば「川」に見えますよね。

作者の俵さんは、シングルマザーとして一人息子を育てています。ある秋の夜、息子に添い寝していた俵さんは、それが「川」の字ではなく「り」の字だと気づきます。そして「り」の字になって眠る母子のもとには、「りりりりりり」とコオロギの音が響いているのです。

「り」の字と、「りりりりりり」という虫の音の、「り」が重なり合うおもしろさ。しかし、この歌の魅力はもちろんそれだけではありません。秋の夜ふけ。母親の隣で安心しきって寝息を立てる子ども。そんな息子の寝顔を見ながら、俵さんは穏やかな幸せを感じています。「りりりりりり」という澄んだコオロギの鳴き声は、安らかな夜をいつまでも包みこんでいるのでしょう。

誰にでも、こんな優しく懐かしい秋の夜の思い出が一つ二つ、記憶の片隅にころがっているのではないのでしょうか。

コオロギの鳴き声はこちら。 <https://www.youtube.com/watch?v=prYHA7lid9s>

八月の終わり、中学校の同級生のグループLINEに、中学校の三年間、学年主任としてお世話になり、3年生の時には担任もいただいた清水先生の訃報が伝えられました。二年前の同窓会でお会いして、だいぶお年を召したけれどまだまだ元気そうだった先生の残念な知らせ

に、しばらくスマホの画面を見つめてしまいました。

告別式は仕事の関係で出られず、お通夜だけでもと思い、通夜式の行われる日の夕方、先生がお住まいだった栃木県茂木町に向かいました。清水先生は、大柄な男の先生で、普段は優しくおもしろい先生でしたが、怒ったときの怖さは尋常ではありませんでした。ちょっとここで詳しくは書けませんが、悪ふざけを見つかって、清水先生から大目玉をくらったことは一度や二度ではありません。しかし自分は、いつも親身になって温かく励ましてくれる清水先生が大好きでした。

式場のセレモニーホールは、国道を少しわきに入った変電所の隣にありました。式場にはすでに同級生数名が来ていて、彼らと清水先生の思い出話をしていると、案内があり通夜が始まりました。導師は地元のお寺の住職らしく、読経、焼香がすむとマイクの前に立ち、生前の清水先生について話をしてくれました。先生は、定年で教師を辞めた後も、地域の行事や活動に中心に関わり、地元では相談役のような立場だった、晩年はお孫さんと遊ぶこととお酒を飲むことを何より楽しみにしていたと聞き、ああ、清水先生は心豊かで幸せな生涯を過ごされたのだなあと感じました。同時に、中学生という多感な時期に、自分は清水先生から、自覚しているもの、自覚していないものを含めて、きっとたくさんのものを受け取っていたのだろう、おそらくそれが見えないところで今の自分を支えていてくれるのだろう、とも考えました。

通夜が終わり式場を出ると、晩い夏^{おそ}の夕闇がゆっくりと帳^{とばり}を下ろそうとしていました。同級生に別れを告げ駐車場に向かう途中、近くの草むらからは、気の早い虫たちがさかんに澄んだ音色を響かせていました。

師の通夜の果つる薄暮^{むし し ぐれ}や虫時雨 梶 克治

清水先生、本当にありがとうございました。

☆ ☆

というわけで、今回の校長室だよりは、今の季節にぴったりの「虫の音特集」でした。

桜にはお花見スポットがありますが、同じように虫にも虫の音スポットがあると思います。それではここで、筆者のおすすめ虫の音スポットを発表します。ダラララララ(ドラムロール)！…学校の前庭です！

この時期、日が落ちて薄暗くなってから前庭を通ると、前からも後ろからも、右からも左からも、まさに 360 度、虫の音に取り囲まれます。祇園寺の植え込みから、飯村先生の立像付近から、校門近くの桜の根元から、何十、何百という虫の音が湧き上がり、まるで虫の音の海をを漂っているような感覚を覚えることもあります。

自分は、本校の教員となつてまもなく 40 年になりますが、秋になると毎年毎年この虫の音を聞いてきました。仕事に追われて疲労困憊の日、同僚と意見が合わずぶつかってしまった日、生徒への指導がうまくいかず自己嫌悪をいだきながら帰る日、虫の音の海は、そんな心のしこりをほんのちょっと和らげてくれていたような気がします。

がんばった一日の終わりのわずかなひととき、生徒諸君も、秋の夕暮れを彩る虫の声に耳を傾けてみてはどうでしょう。(終)

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、

HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。